



【2003年頃の筆者】



いい年こいた大人が 川で仲良く魚とり



子供のころから続く私の趣味は淡水魚。子供のころは故郷岡山市内の旭川で毎日釣りをしていました。当時は学研のポケット図鑑1冊を頼りに、釣った魚の名前を調べ、食べてみて、名前と味を頭にインプットしていました。

大学を卒業して数年後、岡山淡水魚研究会が旭川の放水路内の、埋め立て寸前の中島大池でアユモドキを救出しているのがTVで放映されているのを見て、自分もこの会に入りたいなと思っていた。このころは県北に転勤していましたので、近くに住む魚好きの方と投網をしたり水槽で川魚を飼育したりと、常に淡水魚とともに生きてきました。その後転勤を重ね、岡山市内に定住するようになり、近所で獲った見慣れないタナゴを岡山淡水魚研究会の当時の会長のところに持ち込んだことから、入会することになりました。

以後30年にわたって活動を続けてきました。私が入会したころは会員が皆若く元気でしたが、そのままのメンバーが年を経ても60代の私は今だに新米であり、今や「淡水魚老人会」の様相を呈してきました。



院長 形成外科
青 雅一

日本形成外科学会 専門医
岡山大学臨床教授

当会は1974年に結成された岡山で最初の自然保護団体であり、40数年間にわたって水辺の生物の調査・保護活動を行ってきました。近年の、河川改修、圃場整備、農業形態の変化、自然環境の悪化により、絶滅の危機に瀕している種も少なくありません。この中でもアユモドキ(国指定天然記念物・絶滅危惧種IA類)とスイゲンゼニタナゴ(絶滅危惧種IA類)はもっとも絶滅が危ぶまれる種として保護されています。

アユモドキ(*Parabotia curtus*)はドジョウに近縁の魚ですが、ドジョウとは異なり、体は側偏し(平たい)、尾が2叉します。また口には6本のひげがあります。かつては、アユモドキは岡山県の中～南部、琵琶湖・淀川水系に広く分布し、岡山平野では食用にされていました。

また、広島県の芦田川でも採集の記録があります。しかし、近年その個体数は激減し、生息範囲も極端に狭まっており、1977年に国の天然記念物に指定されました。現在では、岡山県の旭川・吉井川水系のごく限られた地域と、京都府亀岡市で確認されているにすぎません。岡山県の高梁川水系では、すでに10数年前より絶滅が予想されており、もっとも絶滅が危ぶまれる種のひとつにあげられています。約60年間でここまでアユモドキが減少した理由は、圃場整備と用水路～畔のコンクリート化によって産卵場所へ進入できなくなったことに他なりません。



【アユモドキ成魚】



【スイゲンゼニタナゴ】



2005年からは人工繁殖に取り組んで技術を確立し、得られた個体は啓発活動(展示・貸出)に使用されていますが、近年、野生のアユモドキを使った人工繁殖ができない年があるほど、個体数が減少しています。その原因是、産卵場所の消滅の他にも多数ありますが、近年のカワウの増加も大きな要因で、アユモドキのみならずすべての淡水魚が激減しています。

2007年からはスイゲンゼニタナゴの生活史調査を開始し、生息域、生息環境を調査しましたが、マニアの密漁から守るために公表せず、密かに守っています。

岡山県は南北に流れる吉井川、旭川、高梁川の3大河川を有し、淡水魚の種類・密度ともに全国一豊富なマニア垂涎の地であるため、観賞魚を求めて採集にやってくるマニア・業者も多く、稀少淡水魚の密漁者が後を絶ちません。2006年度から環境省からの委託により、「生息環境・密漁パトロール」を行っており、2007年5月には当会の会員と警察がスイゲンゼニタナゴとアユモドキを密漁していた県外からの2人組をお縄にしました。これら2種の他にも県・市のレッドリストには希少種が記載されていますが、生息数の減少が明らかに採集圧によるものと考えられる種が存在します。

私たちが絶滅を危惧するもう一つの希少種は「川ガキ」です。次代の後継者である川ガキがいなくなると、保護活動は途絶えてしまいます若い会員を増やすことが急務となっており、

2003年から「川ガキ道場」という水辺教室をアユモドキ生息地の公民館と共に催行っています。その後、次々と県内各地で水辺教室をするようになりました、会員がインストラクターを務めています。

私の趣味というか道楽について長々と書き連ねましたが、今後も体が動くうちはこの活動を続けていきたいと思います。



【保護している産卵場所(休耕田)】